

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第82号

毎月発行

発行 2019年(平成31年)3月16日 土曜日

2019年(平成31年)3月16日 土曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、65歳、経営コンサルタント、趣味は縄文研究、今年1月に『東北先史時代学』を提唱、東北から日本を変えることを標榜。また縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。映像プロデュース事業にも進出。



この路線のままでいいのか、いまならまだやり直せる
あれから8年後の今、インフラは復興したようだが、「人口減少」、「被災地に戻らない被災者」、「復興支援需要激減」、「企業存続危機」、「除染停滞」、他方で「内陸部過疎化加速」、どこをとっても良い傾向が見られない

被災市町村の人口推計

【注】カッコ内は10年比%。福島県5町村は原発事故の影響で、それぞれ個別に目標年を推計。富岡町は推計値を出していない

	2010年 国勢調査	15年 国勢調査	40年市町村 ビジョン	社人研 40年推計	社人研 45年推計
岩手県	1,330,147	1,279,594(96)		957,788(72)	884,518(66)
洋野町	17,913	16,693(93)	11,337(63)	9,744(54)	8,450(47)
久慈市	36,872	35,642(97)	26,653(72)	26,111(71)	23,950(65)
野田村	4,632	4,149(90)	3,923(85)	2,426(52)	2,100(45)
普代村	3,088	2,795(91)	2,258(73)	1,547(50)	1,319(43)
岩泉町	10,804	9,841(91)	6,612(61)	5,720(53)	5,014(46)
田野畑村	3,843	3,466(90)	2,930(76)	1,909(50)	1,632(42)
宮古市	59,430	56,676(95)	43,264(73)	37,441(63)	33,688(57)
山田町	18,617	15,826(85)	11,274(61)	9,208(49)	8,037(43)
大槌町	15,276	11,759(77)	8,987(59)	7,094(46)	6,220(41)
釜石市	39,574	36,802(93)	27,094(68)	23,266(59)	20,909(53)
大船渡市	40,737	38,058(93)	28,913(71)	24,060(59)	21,334(52)
陸前高田市	23,300	19,758(85)	14,454(62)	12,900(55)	11,486(49)
小計	274,086	251,465(92)	187,699(68)	161,426(59)	144,139(53)
宮城県	2,348,165	2,333,899(99)		1,933,258(82)	1,809,021(77)
気仙沼市	73,489	64,988(88)	53,557(73)	38,305(52)	33,396(45)
南三陸町	17,429	12,370(71)	8,000(46)	7,406(42)	6,451(37)
石巻市	160,826	147,214(92)	119,437(74)	96,913(60)	86,697(54)
女川町	10,051	6,334(63)	4,658(46)	3,508(35)	3,025(30)
東松島市	42,903	39,503(92)	36,300(85)	31,821(74)	29,655(69)
松島町	15,085	14,421(96)	10,165(67)	9,554(63)	8,496(56)
利府町	33,994	35,835(105)	39,245(115)	36,193(106)	35,037(103)
塩釜市	56,490	54,187(96)	42,800(76)	39,052(69)	35,625(63)
七ヶ浜町	20,416	18,652(91)	17,119(84)	13,192(65)	11,906(58)
多賀城市	63,060	62,096(98)	57,651(91)	49,378(78)	45,821(73)
仙台市	1,045,986	1,082,159(103)	1,030,000(98)	972,871(93)	922,655(88)
名取市	73,134	76,668(105)	83,082(114)	79,081(108)	76,595(105)
岩沼市	44,187	44,678(101)	40,156(91)	39,497(89)	37,355(85)
亘理町	34,845	33,589(96)	33,528(96)	24,502(70)	22,154(64)
山元町	16,704	12,315(74)	8,470(51)	7,829(47)	6,806(41)
小計	1,708,599	1,705,009(100)	1,584,168(93)	1,449,102(85)	1,361,674(80)
(仙台市除く)	662,613	622,850(94)	554,168(84)	476,231(72)	439,019(66)
福島県	2,029,064	1,914,039(94)		1,426,392(70)	1,314,903(65)
新地町	8,224	8,218(100)	9,350(114)	-	-
相馬市	37,817	38,556(102)	35,266(93)	-	-
南相馬市	70,878	57,797(82)	45,550(64)	-	-
飯館村	6,209	41(1)	2,467(40)	-	-
川俣町	15,569	14,452(93)	11,617(75)	-	-
浪江町	20,905	0	7,923(38) ※35年推計	-	-
葛尾村	1,531	18(1)	580(38)	-	-
双葉町	6,932	0	2,453(35) ※60年推計	-	-
大熊町	11,515	0	2,161(19) ※28年帰還推計	-	-
富岡町	16,001	0	-	-	-
田村市	40,422	38,503(95)	32,640(81)	-	-
檜葉町	7,700	975(13)	4,914(64)	-	-
広野町	5,418	4,319(80)	3,167(58) ※30年推計	-	-
川内村	2,820	2,021(72)	2817(100) ※35年推計	-	-
いわき市	342,249	350,237(102)	278,562(81)	-	-
小計	594,190	515,137(87)			

**両眼を大きく広げて
事実を直視せよ**
マスメディアでは、相も変わらず、毎年この日の前後に特集を組んでいる。そこでは「絆」、「忘れるな」という言葉の乱舞、そして悲しみを押しつけるような演出があふれている。そうしたマスメディア特集にもかかわらず、大震災直後に想定した悪い予想が

どんどん表面化してきている。非常に残念なことだ。政府主導で始まった大震災からのインフラ復興は八年かけてようやく形が整ってきたが、他方で、この八年間のトレンドを見たら、被災地は復興どころかどんどん衰退しているのが手に取るように分かる。そして、復興は進んでいくという言葉がむなしく響くどころか、むしろ、あま

りにも実態と違いすぎる認識に対する怒りに火をつけることにつながる。換言すれば、この八年間の一連の流れは、箱モノ行政の最悪の見本というしかない。**満八年目を迎えて明らかに進んできたこと**表を見ればすぐに分かるが、被災地の人口減少は目を覆うばかりである。

もともと過疎化が進行していた被災地なのに、大震災で人口減少に拍車がかかった。福島県の話は一旦保留するとして、箱モノが整備されても、復興するまでが遅かったし、一時避難場所だった場所が、定住の場所と化しているのだから当然である。一時避難という場合には、数か月というのが現実の生

国立社会保障・人口問題研究所(社人研)による2045年までの岩手、宮城両県沿岸部の人口推計。福島県については市町村別推計を行っていない。

宮城と岩手の沿岸部の人口推移

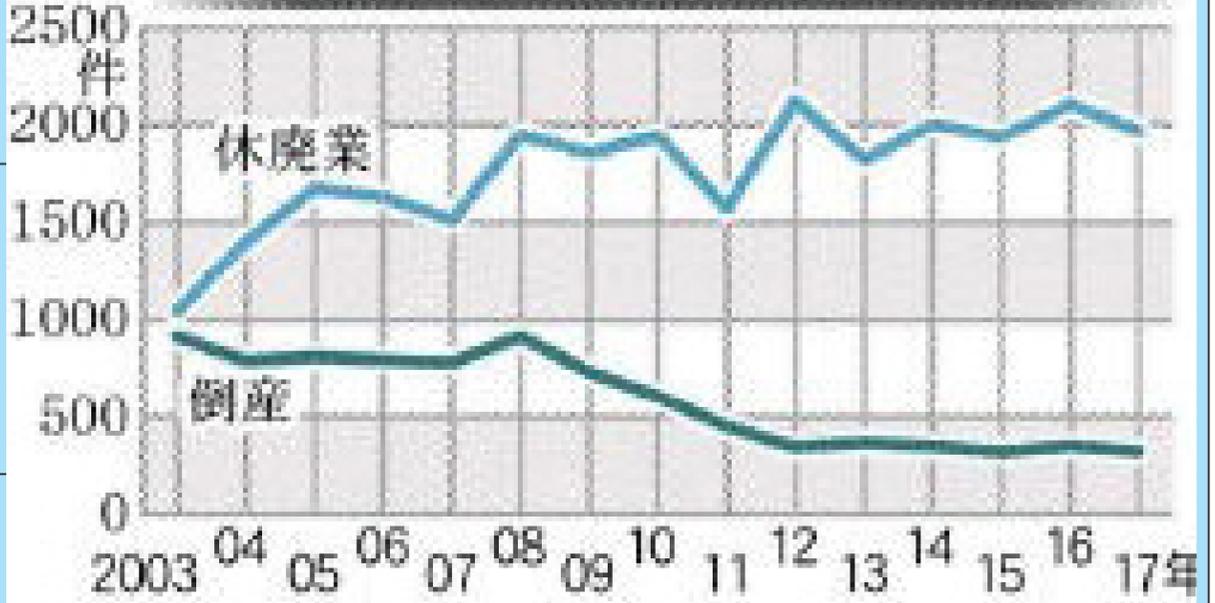


【注】2010～15年は国勢調査、20～45年は社人研推計値

「国立社会保障・人口問題研究所(社人研)による2045年までの岩手、宮城両県沿岸部の人口推計

悪影響
人口が減れば、その地に
悪影響
人口が減れば、その地に

東北6県の休廃業・倒産の推移



倒産企業数だけに注目してはならない一図は東京商工リサーチ東北支社



第55回

水産業再興のための
料理レシピ紹介

《牡蠣フライ》

いまが旬の牡蠣の
旨味を包み込んだ
牡蠣フライ



郷土料理愛好家
松本由美子氏

【材料】 カキフライ(2人分) — 牡蠣 200グラム、塩 少々、小麦粉、パン粉、とき卵、あげ油

【作り方】 ① 牡蠣は、塩水で洗うか、小麦粉をまぶして洗う。
② 洗ったら、キッチンペーパーで水気をとります。
③ 180度の油できつね色になるまで、揚げます。

— 8年前からの牡蠣復興物語 —

【筆者コメント】：8年前の大津波では、三陸沿岸の牡蠣棚が壊滅した。そこから2年、3年をかけて何とか復興したが、流通市場への供給量不足問題で、結局のところ、ネットによる直接販売に切り替えざるを得なくなったということがあった。その次のトラブルは、松島湾などで発生した、夏に海水温が上昇し、牡蠣収穫量が大きく落ち込んだということもあった。大震災後、幾多の災害・トラブルに見舞われた牡蠣は復活した。美味しくいただきます！

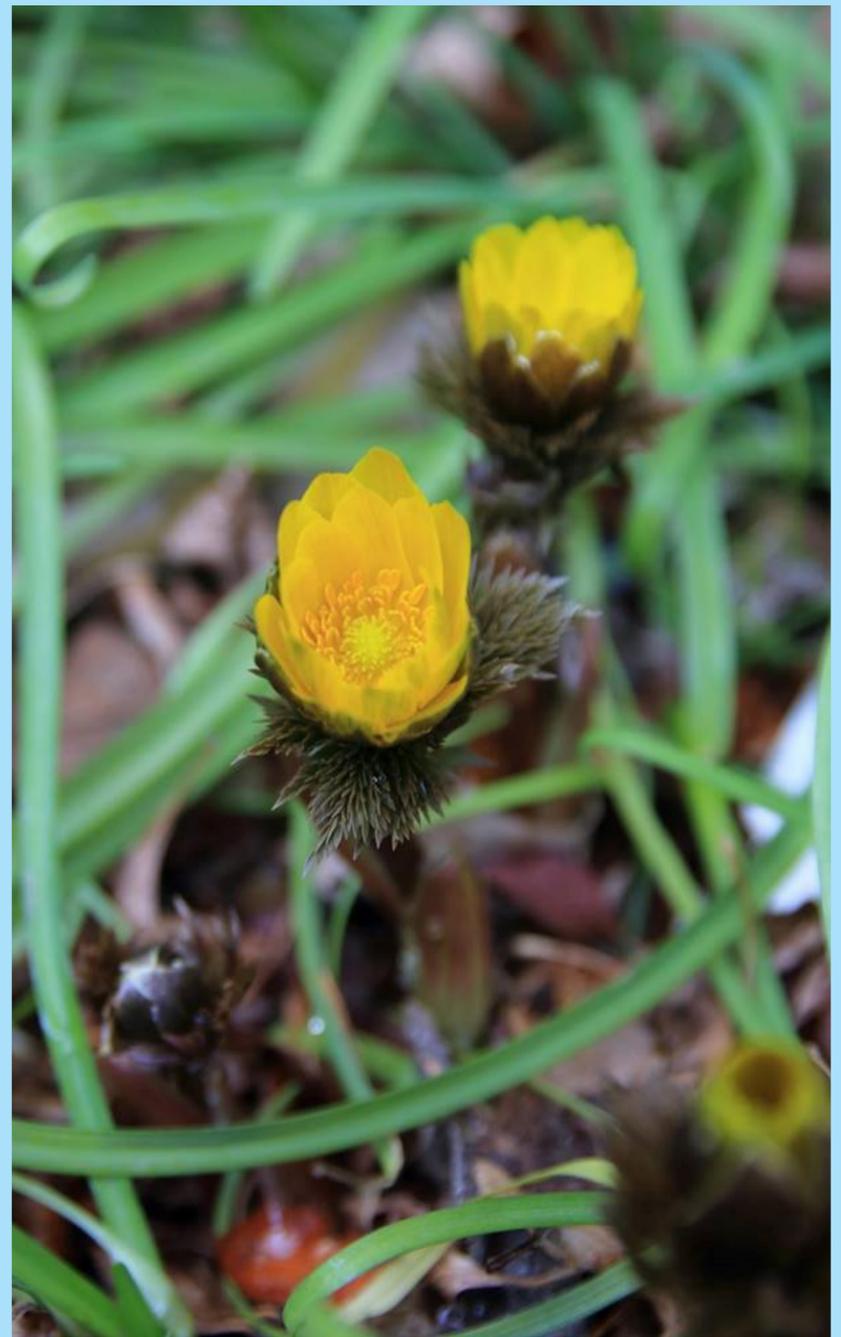
(3・11と日常喪失の一側面)

日頃の何気ない日常というものは、実に多様で独自の慣習と手順とモノ、その他さまざまな要素が組み合わさって出来ている。卑近な例ではあるが、朝起きて洗面するという事に焦点を当てて考えてみても、実に複雑な組み合わせなのである。慣れれば無意識で意識することもめったにない。しかし、それらの巨大で総合的な複合体である「何気ない日常」が徹底的に破壊されたら、あるいは失われたら、生きる刻々の瞬間がとてつらくなる。何事にも意識して行動し、なおかつ「欠落」を意識する生活は耐え難い。

【小さなニュース】

— 日本酒プロデュース企画開始 —

『三陸酒海鮮会』を開催して以降、東北地酒の銘柄だけはだいぶ詳しくなった。それ以前も日本酒好きではあったが、それほど詳しくない訳ではない。しかし現在、詳しくなるということ以上の思いが募ってきた。それは、新たな日本酒銘柄作りである。つまり日本酒プロデュース企画である。自分好みの酒が欲しくなったのである。でも地酒をいただく方は詳しいが、作るのはまったくの素人である。そこでプロの手助けを得て、この企画に挑戦しようと考えた。早ければ年内に試飲が可能になるかもしれない。



写真でお伝えする **東北の風景(冬から春へ)**

写真撮影 尾崎匠



復興シンポジウム

仙台防災未来フォーラムの意義

震災から丸八年となる前日の三月一〇日、仙台国際センターで「仙台防災未来フォーラム2019」が開催された。

四年前に国連世界防災会議が仙台で開催され、「仙台防災枠組」が採択されたが、それを契機にその翌年から年に一度、東日本大震災の経験や教訓を今後の防災につなげるために開催されている仙台市主催のイベントである。

今回は防災に携わる七四団体が出展し、市民など四〇〇〇人超の参加があった。そう、震災から八年が経とうとしてこの時期でもそれだけの参加があるというのはいいことだと思ふ。今年には「しまじろう」キャラクター「スージー」など子ども向けの企画もいくつかあつて、親子連れもたくさん参加していた。震災から八年が経過して、震災後に生まれた

震災を体験していない子どもたちが年々増えている中、このような子ども向け企画を充実させていくのは防災教育の上でとてもいい試みであると思ふ。

しまじろう、グッジョブ！である。

震災復興をどう考えるか

東北大学災害科学国際研究所主催の連携シンポジウム「震災8年シンポジウム〜東日本大震災教訓の共有と継承を考える〜」では、2021年のインド洋大津波被災地、インドネシアのアチェの復興も参考にしながら東北の復興を考えると興味深い企画であった。

アチェはまさに震災復興の先輩であり、私もかつて自分のブログでそのことを書いたことがある。

シンポジウムでは、仙台の復興公営住宅での社会的孤立、アチェの個人力ではなく家族の力を活かした再建が対比されていました。

一方、日本はそうした家族や地域のしがらみから離れて一人でも生きていける社会を追求してきた結果として現在があるという実情があり、であればだからこそできることを考え、よい点を伸ばすべきとの意見もあつた。

各シンポジウムの言葉で印象に残った言葉は以下のようなものであった。

西芳実氏(京都大学東南アジア地域研究研究所准教授)・大文字の復興(共通の目標)と小文字の復興(個別の目標)がある。

復興だけを考えるのではなく、被災前からの課題に着目し、災害に限定せず災害後を考えることが必要。

本江正茂氏(東北大学大学院工学研究科准教授)・復興に深刻になりすぎない方がいい。語るトーンを優しく、違う角度からも見てみる。面白がつてやる。

マリ・エリザベス氏(東北大学災害科学国際研究所情報管理・社会連携部門准教授)・復興と防災を一緒に考えるべき。復興には終わりは無い。

笠原豊氏(東北放送報道部ディレクター)・冷静に考え、検証する段階にきている。その部分でメディアと研究者の連携は重要。

他のセッションでは、ANIST(アイネスト)主催の「健康寿命を延ばして災害弱者を減らすまちづくり」では、地域の防災力を高めるに、自分で判断・行動できる「災害弱者にならない事前対応」が望まれるとして、高齢者の健康寿命を延伸し、災害弱者を減らすまちづくりの事例が紹介された。

東北大学工学研究科フィールドデザインセンターとNTTサービスエボリューション研究所による「ステルス防災・防災・減災の行動を日常にインストールする」では、普段後手に回りがちな防災を、日常の負担を軽減する、あるいは日常の中に織り込まれたような形で提供される試みについて提案された。そのネーミングと共に興味深い取り組みであった。

東北福祉大学主催の「障がいと地域防災-情報提供・支援のあり方とは-」では、障がい者が積極的に周囲と関係性を構築することによって、災害発生時に支援される側から支援する側に回る可能性について言及されたことが印象的であった。

翌日八回目の三月二日は朝から強い風と雨であった。この八年で雨の日は初めてだろう。あの日、地震に追い打ちをかけるように雪まで降ってきたことを思い出す。

八年経つても、この日だけは何かいつもと違う心持ちになる。

「健康寿命を延ばして災害弱者を減らすまちづくり」では、地域の防災力を高めるに、自分で判断・行動できる「災害弱者にならない事前対応」が望まれるとして、高齢者の健康寿命を延伸し、災害弱者を減らすまちづくりの事例が紹介された。

今年もまず、弟がいた若林区役所を訪れる。献花場は、昨年から近くの若林区文化センターに移されたので、そちらに行つて献花する。

会場では仙台市の追悼式も開催されようとしているところだったが、出る気にはならず、今年もあの日弟が通つたであろう道を自転車で一路荒浜に向かった。

津波に対する備え

荒浜の手前を走る県道一〇号、塩釜百理線は、震災の大津波を高速道路の仙台東部道路が堰き止めたという経験を活かして、多重防壁の一翼を担うべく、高架化が進んでいる。周囲の景色も様変わりしつつあつた。

仙台平野はいざ津波という時に逃れることのできる高台が存在しない。そこで、沿岸部には津波避難タワーが一三箇所整備された。震災遺構として整備された旧荒浜小学校もいざという時にはあの時と同じように避難タワーとして機能することになっているので、合わせて一四箇所の高台が設けら

れたことになる。次の地震に対する備えは着々と進んでいる。

今年も雨風が強かつたためか、荒浜を訪れる人の数は例年より随分少なかったが、それでも旧浄土寺の慰霊碑の前や荒浜慈聖観音の前では、一心に手を合わせる人の姿があつた。

沿岸にあつた松林は大津波でほとんどが倒れてしまひ、いまだ櫛の歯が欠けたような有様だが、少しずつ新たに植林が進んでいる。何十年後か、この海沿いにもう一度見事な林が復活することだろう。

防潮堤に登つて見下ろすこの日の海は、強い風を受けて大きな波が打ち寄せていたが、はるか向こうで波しぶきが立っているだけで、あの日のこの防潮堤を易々と超えていった大津波とは比べるべくもない。

この地に大津波が押し寄せた一五時五四分に合わせ、今年も弟の遺体が見つかった南長沼に赴いて手を合わせる。

これで何がどうなるというところでもないが、今や自分の中では毎年の恒例行事である。

帰りに、霞目にある「浪分神社」に寄つた。

江戸時代にこの地を襲つた大津波が、ここで南北に分かれたと伝えられている。つまり、過去の津波到達地点

を示す神社であり、実際今回の地震でもここから二キロほど東にある仙台東部道路が津波を堰き止めることがなかつたら、津波は恐らくまたこの神社の近くまで押し寄せたに違いない。しかし、この浪分神社に伝わる津波に関する伝承は、残念ながらこの地域に広く知られてはいなかつたそうである。その理由としては、この神社が明治になって一旦別の神社に合祀されて移転したという事情もあるのだろうが、どんな教訓も、伝わらなければ意味がない。今回の地震の教訓も、伝える努力を続けなければいけないと改めて思った。

あの日を思い起こす

普段で歩くことの多い私だが、この日はかりほとんと家に帰る。

震災以来、この日はどんなイベントがあろうと、誰からお誘いがあるうと、家へ帰つてあの日を思い起こしながらお気に入りのビールを飲まひにしている。

この先もきつと、毎年この日はそのような一日となり続けるのだろう。

つまみは必ず、子どもの頃、弟と一緒にやつに食べてたやきとりの缶詰である。二人とも特に皮のついたところが大好きで、でもケンカせずに仲良く分け合つて食

べてたことを今も覚えてい

る。

そのようなことを思い返しながらこうして飲み食いで済むのも、生きていければこそ。今日生きていられることに感謝しつつ、もしま明日が来てくれたなら、またいつもの一日を送りたいと思ふ。

あの日を思い起こす

「健康寿命を延ばして災害弱者を減らすまちづくり」では、地域の防災力を高めるに、自分で判断・行動できる「災害弱者にならない事前対応」が望まれるとして、高齢者の健康寿命を延伸し、災害弱者を減らすまちづくりの事例が紹介された。

今年もまず、弟がいた若林区役所を訪れる。献花場は、昨年から近くの若林区文化センターに移されたので、そちらに行つて献花する。会場では仙台市の追悼式も開催されようとしているところだったが、出る気にはならず、今年もあの日弟が通つたであろう道を自転車で一路荒浜に向かった。

津波に対する備え

荒浜の手前を走る県道一〇号、塩釜百理線は、震災の大津波を高速道路の仙台東部道路が堰き止めたという経験を活かして、多重防壁の一翼を担うべく、高架化が進んでいる。周囲の景色も様変わりしつつあつた。

仙台平野はいざ津波という時に逃れることのできる高台が存在しない。そこで、沿岸部には津波避難タワーが一三箇所整備された。震災遺構として整備された旧荒浜小学校もいざという時にはあの時と同じように避難タワーとして機能することになっているので、合わせて一四箇所の高台が設けられたことになる。次の地震に対する備えは着々と進んでいる。

大河ドラマの主役にして みたい東北人たちの事

歴史好きの人間にとつて、様々な時代のシーンを切り取って再現し観てくれる映画やドラマといった映像媒体の存在は有難く、常に心ときめかせてくれるものだ。しかし劇場映画の分野では資金は投入できず、とても、近年なかなか満足していく出来の作品はなく、テレビでも民放局は随分長くまともな歴史劇というものは制作していないようである。そうなる、希望は今や伝統として安定した歴史劇を毎年一本提供し続けてくれているNHKの大河ドラマにしかない、という事になるのか。昔に比べると戦術シンの劣化がひどいとか、変な配役や余計なキ



奥羽現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め、東北好きである。

ヤラクター作り、また進歩した映像技術や脚本を凝りすぎて往年のファンはついていけないなど、毎年何かしら課題を抱えるのが常の枠であるが、例えば震災後の東北の人々の心を掴んだ『八重の桜』のように、知られていなかった人物や歴史に光を当て、それを大勢の人の心に印象づける力は今や劇場映画をも大きく凌駕するものだとと言えるだろう。

そういえば、このところ何年も東北関連の人物が大河ドラマの主要な役回り登場していない気がする。二〇一六年の『真田丸』にて脇を固めた伊達政宗以来、主人公は井伊直虎、西郷隆盛と続いて、今年二〇

一九九年は来年の東京オリンピックに託けた近現代劇で主人公は西南戦争後の熊本県生まれである金栗四三なので昨年の続きのようでもある。そして来年の主人公は明智光秀という具合で、当分大河ドラマで東北がスポットを浴びる機会はなさそうなお話である。

大河ドラマの主人公としては何といつても一九八七年、伊達政宗が主役となった『独眼竜政宗』が今も地元内外で語り草である。実は政宗はそれまでも戦前戦後を通じて、何度か劇場映画の主人公になっていたが、

今や人々の印象に残るのはほとんど大河ドラマの政宗である事を考えると、やはり一年を通して描くというスタイルが歴史を語るのに最もふさわしい事を示しているのだから。以来、直江兼継や真田幸村の好敵手としての重要な脇役始め様々な登場の仕方、数々の俳優が演じてきた政宗だが、他には平安期の平泉藤原氏、特に源義経に關係の深い三代秀衡ぐらゐで、東北関連で重要に扱われてきた人物はあまり思い浮かばない。

東北には他に一年を通して描かれるべき歴史的人物は存在しないのだろうか？ 本稿ではいつもながら筆者の趣味的な話題として筆を進めつつ、大河ドラマを通して現代の東北にアクションを促せる可能性についても思いを巡らせてみたい。

まず考えねばならないのは、大河ドラマで描かれるべき時代とは古代のいつ頃か、近代のいつ頃までかという事だろう。現在オリビックを題材に近代劇が放送中で、脚本がかの「伝説的朝ドラ」である『あまちゃん』を生み出した宮城県出身の宮藤官九郎という事で、工夫があつて面白いにもかかわらず空前の低視聴率に喘いでいる事からも、視聴者が明治以前の「戦記物」を求めている事は明白のようである。実際、『独眼竜政宗』以前にも近現代劇が続いており、低視聴率

に悩まされた過去があつたようなのだ。私個人的に、東北の歴史に上気になる人物には阿部比羅夫がいる。時は七世紀飛鳥時代、朝廷の命で水軍を率いて日本海に勇躍、蝦夷始め肅慎など異民族を次々に平定していき、その活動域は一説には樺太まで及んだという極めてダイナミックな人物である。彼は蝦夷の神を祀り、蝦夷と酒を飲み交わし懐柔しながら北上したという単なる侵略者の枠に収まらない魅力を持つており、彼の活躍を描く事で現在裏日本と呼ばれている日本海域に脚光を当て、新たな歴史観を大衆に提案できる可能性も秘めている。

しかしながら、歴代大河ドラマの舞台となる時代の最古記録は、平将門の平安中期である。かつて大化の改新がNEEKでドラマ化された事があつたが、あまりに昔の事になると想像の部分が大きくなり過ぎ、リアリティを出すのが難しくなるのも事実だ。一方、近代の方は今年のドラマの場合かなり無名の人物を扱っているせいもある。低視聴率であつて、扱った人物によつては明治から昭和期でも充分受け入れられるものになるはずである。ただ、例えば宮澤賢治や太宰治といった文学者ではなく、石原莞爾(鶴岡市出身)や甘糟正彦(仙台市出身)などどうして政治や戦争に絡んだ人物が大河向きという事は言

えそうではあるが。平安から徳川の時代まで、激烈に生きた東北の人物といえ、アテルイなどの蝦夷や平泉藤原氏、それに南北朝の北畠顕家も思い浮かぶが、蝦夷連は史料が少なく想像部分が多くなるし、顕家はその人生が彗星の如く短すぎる。例えば顕家とともに北朝側と戦い、主の死後も転戦を続けた伊達氏十代・行朝を主人公に据えて描くのも面白いかもしれない。この時は、奥羽北部の南部師行や現在の福島県南部を領した結城宗広も含めて東北の主だった武将たちが力を合わせ戦つた、ある意味夢の共演というのか、相当に面白い時代だったと言えるはずである。

南部氏といえ、東北北部に群雄割拠した武将の存在は気になる。この辺りという高橋克彦の小説『天を衝く』の主人公・九戸政実が思い浮かぶが、本来複雑な関係でわかりにくい南部一族の中で、「天下人・秀吉に盾突いた」というわかりやすい(説明しやすい)ストーリーを持つた政実の去就は充分にドラマティックであると言えよう。とはいえ、九戸一族の末路のあまりの悲惨・救いのなさ故、大河ドラマの題材にはいかがなものか、というのも正直なところだが(平清盛と平氏の末路を考えると大河と悲劇的結末は相反するものではないが)。では、九戸が蜂起する原

因となった南部信直や津軽為信はどうであろうか。この両者いづれも大河ドラマの主役に据えるにはいま一つスター性に乏しいが、実は現代に至るまで続く「津軽と南部の仲の悪さ」のきっかけを作っている二人なのである。戦国期に北東北の広大な領土を有していた南部氏の、ほぼ植民地化していたといえる津軽地方を様々な策略を用いて独立に導いたのが、津軽為信である。彼は南部宗家を継いだ信直の父を殺害していた為、元より仲が良くなるはずもなかった。当時天下統一に動いていた豊臣秀吉に、南部とは別のルートで接近し、石田三成を通して独立大名としてのお墨付きを得る。謂わば巨大すぎて鈍重になつてしまつた南部の裏を掻き続けた実に機敏で狡猾な津軽という印象だが、一方で独立を認めてくれた秀吉や三成への恩を徳川政権下になつても決して忘れなかった為信はこれも魅力的な人物である。恐らく彼を主人公にした大河ドラマなどは、盛岡を中心とする南部地方の人々は観もしないだろうし、例えば戊辰戦争時に奥羽越前同盟を裏切り、新政府軍への忠誠を示すために降伏後の南部藩を攻撃するなどの津軽藩には秋田藩と同様の後味の悪さがある。もちろん、伊達政宗にも、秀吉、家康にも同様の遺恨を売った地域や層が

の発展にとつて意義のある事ではないだろうか。翻つて、南東北に目を移してみれば、鎌倉期から酒井氏入部までの長きに渡り庄内を支配した大宝寺氏と武藤氏の存在があり、特に十七代・義氏は一旦弱体化した大宝寺家の再興に奮闘した豪傑にして、未だほとんど映像化された事のない人物である。その宿敵であつた内陸の猛将・最上義光が伊達家の宿敵でもあり、『独眼竜政宗』で悪役風に描かれて以来イメージが定着してしまつて、挙すべき大河ドラマの舞台の一つは戦国期の北東北であり、その主人公は南部の内紛の中からそれぞれの生き方を見据え、滅び、あるいは生き延びて現在まで城や街の姿を遺した、九戸政実や南部信直、そして津軽為信ら三つ巴の「三国志」的北奥羽史、と言えよう。

そして南部と津軽の領土争いを見ながら、この大地がそもそも誰のものなのか、今に続く津軽・南部の喧嘩の無意味さについて考えて

暗部にも目を背けずいかに挑むかが大河ドラマの命題といえるかも知れない。よくよく考えてみると、これらの延々と続く確執劇は源頼朝が平泉を滅ぼし、親族や家臣の血族が奥羽一円に領土を割り振られた事に始まつた果て無き縄張り争いである。平泉の世界的にも誇れる平和思想が広く認識された今、あらためてその後にこの地を席巻した源氏の呪われた爪痕の意義について想いを巡らすべきではないだろうか。

ならば次代に東北から推挙すべき大河ドラマの舞台の一つは戦国期の北東北であり、その主人公は南部の内紛の中からそれぞれの生き方を見据え、滅び、あるいは生き延びて現在まで城や街の姿を遺した、九戸政実や南部信直、そして津軽為信ら三つ巴の「三国志」的北奥羽史、と言えよう。

最後に、前稿と同じような船の話になつてしまふ恐縮だが、大河ドラマが、そして東北の知られざる歴史そのものが、これからの東北を動かしていくその可能性を信じて、結びと

という背景も大河ドラマの枠を超えてしまふくらいにドラマチックである。だがもしかすると、最も大河ドラマ化が急がれねばならぬのが、彼かも知れない。その理由は、建造されて三十年が経とうとしている復元船サン・ファン・パウティスタ号の存在にある。

震災時の大津波による損傷、年月による腐食などから、数年後の解体が検討されている一方、クラウドファンディングが提案されるなど修理・保存を求める声も高い。ネット上の資金調達などを成功させる為には、やはり大河ドラマでこの船の凄さ、存在意義を全国、あるいは世界にまで示す以上の名案はないだろう。

しかし南東北というなら、伊達政宗の家臣であり、慶長遣欧使節を率いて欧州へ渡つた支倉常長もまた、強く推したい候補として最後に挙げておこう。地元宮城では比較的良好に知られた人物ではあるが、船乗りとしてだけでなく、武勇も認められていたなど、

「復元船「サン・ファン・パウティスタ号」進水25周年記念企画展」
進水25周年

進水式

「サン・ファン号が生まれた日」
平成30年 平成31年
7月21日(土)~3月25日(月)
宮城県歴史館新船ミュージアム 蔵前橋
09:00~17:00(入館無料)

サン・ファン館
宮城県歴史館新船ミュージアム
〒981-8501 宮城県仙台市青葉区蔵前
TEL:0225-24-2210
http://www.san-fan.jp

支倉とサンファン号が主役となる日は来るか？(サンファン館HPより)



山の神舞い



ゴンゲン様

長い長い冬が終わりを告げ、春の気配が色濃くなってきたのが「啓蟄」である。虫だけでなく人も、長期間に亘り寒さに収縮していた心身を思い切り伸ばす季節の到来である。
そして遠野にも春を告げる催しがやって来た。それは国指定重要無形文化財の岩手県宮古市の黒森神楽の南廻りの巡行であり、2年に1度、今年も遠野にやって来た。
筆者は何と言っても「山の神」が大好きである。赤い面がたまらない。画像の「跳躍」もすごい。おどけた「ひよっこ」も「大蛇退治」もいい。見に行きたかった。コケの花や冬のヤマユリから春が飛び出して来た。

シリーズ 遠野の自然
「遠野の啓蟄」
遠野 1000 景より



大蛇退治 (おろちたいじ)



山の神舞い2



冬のヤマユリ



黒森神楽巡行 「ひよっこ」



コケの花



土盛りの竪穴住居

縄文時代のイメージに誤り多い 岡村道雄氏による長根貝塚講演

宮城県涌谷町の長根貝塚はやはり重要な貝塚、試し発掘のみとはまことにもつたいない—東北縄文にさらなる光を！

当新聞が企画・プロデュースした映画の『涌谷7000年の歴史』でも取り上げた『長根貝塚』を焦点とした講演があると聞いたのは先月だった。その映画上映が今月二十四日で、それにわずかに先行する形での思わぬタイミングであり、何かしら強いご縁を感じた。涌谷町での古代遺跡の講



岡村道雄氏

演もめずらしいが、縄文貝塚とは驚いた。当然即座に参加を決めた。

この貝塚は宮城県涌谷町小里地区にある今から七千年前の貝塚である。映画の中でも訴えが、この貝塚が非常に貴重な貝塚なのにもかかわらず、これまで三回の試掘程度の発掘しかされていないのは、ま



長根貝塚発掘の発掘物一覧

ことにもつたいない。もし本格発掘されたら、ひよっとしたらすごいものが出現して、考古学会に大きなニュースを提供するのではないか、何せ四千七百年間も使われた貝塚であり、そうした貝塚は国内でもめったにないのである。ましてや国指定の史跡にもなっている。放置状態は不思議というよりほかはない。

講演者は考古学者として著名な岡村道雄氏。それも地元涌谷に居住する佐々木茂植氏が岡村氏の恩師という間柄と聞いた。そのご縁での長根貝塚の講演だった。佐々木茂植氏とは昨年二度お会いして、考古学について、涌谷町の武家社会についていろいろご教授いただいたご縁がある。



長根貝塚発掘の遮光器土偶類似土偶

岡村氏の講演で印象に残ったのは何点かある。最初は、縄文時代の竪穴住居の様式である。現在では、有名な静岡県弥生・登呂遺跡の住居などが「かやぶき屋根」であるが、あれは誤りだという。正しいのは、屋根に土を盛った形式であり、これはユーラシア北部、シベリアなどでも見られる共通の形式だという。



“祈り”ではなく“座産”とする土偶

かつて、建築界の重鎮が提示したかやぶき形式の竪穴住居を採用したため、誤解が広まったのだという。もうひとつは拝む土偶。これは、「座産」の姿だという。かつての日本でも

この姿勢での出産が一般的だった。祈りというよりも出産時の意気む姿を表現したものだ。* 講演の副題にもあったが、岡村氏にとって最初の古代



長根貝塚発掘の貝類

遺跡発掘の経験が、この長根貝塚であったことである。それだけに強い印象を持たれているようだ。そして、まだまだ遺物が眠っているの、一緒に掘りませんかとの呼びかけが続いている。



冬の竪穴住居想像図

縄文趣味でもなく、観光資源開発でもなく、純粹に縄文時代に脚光を浴びさせたいという思いであり、縄文文化は閉塞日本を打破する何かを有していると信じているからである。* 縄文文化はまだまだ誤解だらけであるとの指摘には勇気づけられた。専門家の誤りを、アマチュアの研究者が正していく方向がしっかり見えてきた。